

中世ノルウェーの「王のサガ」とフェーデ

——『ヘイムスクリングラ』をめぐるナシヨナリズムの問題——

阪西紀子

一 はじめに

ノルウェーの中世について知ろうとする時に欠かせない資料として『ヘイムスクリングラ』がある。最古の伝説時代から一七七年までのノルウェー王たちについての、古アイスランド語で書かれたサガである。その扱う題材によってサガを分類する慣例に従えば「王のサガ」に分類されるもので、日本語で紹介される際にも「ノルウェー王朝史」などの言葉が使われる。著者のスノッリが合理的な態度で節度のある叙述をしていることから、一見信頼するに足る「歴史叙述」のように見える作品であるが、事態はそんなに単純ではない。⁽¹⁾

本論では、『ヘイムスクリングラ』を史料として用い

る場合に問題となる点を、そこで描かれているフェーデをノルウェーにおける現実と見なしうるのかを中心に検討する。そしてそれに関連して、近年気にかかる北欧における中世史研究の傾向——スヴェッレ・バッゲの『ヘイムスクリングラ』に関する著作に代表される——、ナシヨナリズムの問題について考察する。

二 『ヘイムスクリングラ』

『ヘイムスクリングラ』という名称は、ある写本の最初の二語 (Kringla heimsins 「世界の円盤」) から取られている (ただし、この写本では序文の部分が欠落していたため、この二語は「ユングリంగా・サガ」(後述) の冒頭に当たる)。アイスランドの首領にして、散文の

『エッダ』などの著作でも知られるスノッリ・ストゥルルソンによって、一二三〇年頃に書かれたと考えられている。

『ヘイムスクリングラ』は序文と一七のサガから成り、ある刊本では三巻、一二〇〇頁に及ぶ大部な作品である。ただ、個々のサガの長さにはバラつきが大きく、例えば、「オーラヴ聖王(二世)のサガ」は全体の三分の一を占めるのに対して、「静かな(スベヒ)」とあだ名される——この語はサガでは、ある期間何も事件が起こらず、したがって語られるべきことがない場合に多く使われる——オーラヴ(三世)のサガは、二六年間王位にあったにもかかわらず、わずかに七頁しかない。『ヘイムスクリングラ』では、神話の時代を扱う「ユングリング・サガ」に始まり、ハールヴダン黒王、ハールラル美髪王(二世、在位九世紀末—九三〇年頃)、そして、それ以降ノルウェーの王位に就いたハールラル美髪王の子孫たちが、スノッリ自身の同時代に近いマグヌス・エルリングスソン(四世、在位一一六一—一八四年)の治世の一七七七年に至るまで、順次語られていく。

スノッリが利用することのできた資料としては、第一

に、すでに書かれた形で存在していたさまざまなサガ、家系、概観的な歴史叙述、第二に口頭伝承、そして第三にスカールド詩がある。スノッリは一二一八年から一二二〇年にかけてノルウェーに滞在し、広く旅して回ったので、この折に各地の口頭伝承を自ら集めたと考えられる。スカールド詩については、スノッリ自身が序文の中で「正しく詠まれ、合理的に解釈されるなら」⁽³⁾、最も信頼できる資料であると述べている。前述のようにオーラヴ聖王についてのサガが極端に長いのは、彼の王としての事績の重要性によることもあるものの、ノルウェーの豪族たちをキリスト教に改宗させるべく努力し、その戦死が殉教と見なされて聖人として崇敬され、ついにはノルウェー一国の守護聖人となった王として、聖職者たちによって膨大なエピソードが書き記されていた、つまりスノッリが利用しうる資料が大量にあったことが大きいと思われる。

サガ研究の分野では長い間、文献学的な観点が優先されるあまり、歴史的な観点は犠牲にされてきた。その一つの現われが、あるサガ作者がそのサガを書く際に用いたと思われる資料についての研究が非常に重視されて

きたことである。その場合のサガ作者としては、「アイスランド人のサガ」のような「文学」と見なされるものについては、近代の小説家のような存在が、『ヘイムスクリングラ』を初めとする「王のサガ」のような「歴史」と見なされるものについては、近代の歴史家のような存在が想定されている。どちらの想定も明らかに誤っているが、かくて生まれるのが、次のようなコメントである。スノッリは、前述のような多様な資料から「確かな批判的感覚をもって理性に照らして信頼できそうな、そして彼の目的にふさわしい資料を引き出し、天才的な洞察力と建設的な想像力をもってこの資料を一つのサガ作品として再構成し、生命を与えた」。

スノッリによる「オーラヴ聖王のサガ」に先行する、同じ主人公を扱った作品の一つに、『伝説的なサガ (Legendariske saga)』と呼ばれるものがある。この名称は、「近代の歴史家たちによって、スノッリのものに代表される「歴史的な」サガとの対比で与えられた。『伝説的なサガ』においては、異教の神話についてもキリスト教の伝説についても、超自然的なものが重視されていることがその理由である。これとは別に、スノッリが直

接資料として用いた、ステュルミル・カーラソンによる『オーラヴ聖王の生涯のサガ』がある。ステュルミルはアイスランドの司祭で法の宣言者を務め、後にヴィズエイの小修道院長となった人物である。そして「ステュルミルは、聖オーラヴに関して自分が聞いた伝承すべてを無批判に採用したとして非難されている」⁽³⁾。このような資料に基づいて書かれたスノッリの「オーラヴ聖王のサガ」である。確かに、著者自身が「歴史的」であることを目指してさまざまに「合理化」を行ない、また、彼の物語の技法は読む者にそれを真実と受け取りたくさせる。しかし、「歴史的な」サガという語で「信憑性のある」ことが意図されるなら——少なくとも、今世紀初頭まではそうであった——、誤解を招くものであるにちがいない。⁽⁶⁾

『ヘイムスクリングラ』に含まれるサガのうち、「ユングリンガ・サガ」は他のものと異なっている。他のサガは、ハールヴァダン黒王については詳しいことはわかっていないものの、ハールラル美髪王以降、いずれも実在したことが確認されている王たちについてのものである。それに対して「ユングリンガ・サガ」は、『エッダ』や

「古代のサガ」に見られるような神話的・伝説的な題材を扱っている。このサガによれば、アース神たち(egot.: 単数 *æsas*) は元来アジア(*Asia*)に住んでおり、オージンはその首領で偉大な戦士であった。やがてオージンは、ヴァン神であるニョルズ、フレイ、フレイヤらも伴って北欧に赴き、スウェーデンのメーラレン湖のほとりに居を定める。オージンはその王となり、その死後にはニョルズが、その次には彼の息子ユングヴィ||フレイが王となった。このフレイが、ユングリンガル(ユングヴィの一族)の祖先であり、その後子孫であるスウェーデンとノルウェーの王たちが順にたどられる。スノッリによって神々は古代の王に変形されているものの、このサガは、彼が資料として用いたスカールド詩『ユングリンガタル』(字義は、「ユングヴィの一族の一覧」)の特徴を強く残している。⁽⁷⁾

「ユングリンガ・サガ」は、このような特徴を持つゆえに、『ヘイムスクリングラ』を「歴史」と見なしたい人々からは厄介もの扱いされてきた傾向があり、近代の「文学」や「歴史」という概念をサガに当てはめるのは間違いであるとの立場の研究者からは進んで取り上げら

れる。例えば後者の急先鋒、ステプリン||カメンスキイによれば、サガはすべて過去についての、事実と見なされる、あるいは少なくとも程度の差はあれ事実として通る物語である。個々のさまざまなサガの間の差異は、過去からの隔たりの程度と、サガの中で語られることが起こった場所から生じるにすぎず、ジャンルの違いによるものではない。すなわち、潜在的なフィクションを事実として受け容れる可能性は、遠く離れた時代および場所での、よく知られていない出来事については高く、逆の場合には低い。したがって、「王のサガ」は、アイスランド移住以前の出来事、および伝説時代もしくは神話時代について語る場合には、「古代のサガ」に最も近く、一三世紀の王について語る場合には、『ストゥルルンガ・サガ』に最も近い。⁽⁸⁾

ステプリン||カメンスキイが一般論で語っているのに対し、A・Ya・グレーヴィチはある論文の中で、『ヘイムスクリングラ』以外の「王のサガ」は伝説的な時代には触れていないのに、スノッリがあえて触れたのはなぜかを問うている。神話と歴史的事実との区別は、近代の歴史家にとっては重要だが、中世人の意識においては不

明確だ、としたうえで、グレーヴィチは次のように言う。

スノッリはノルウェーの歴史を、ユングヴィによる王朝の創設と、その出発点からこの一族を分裂させた不和、という二つの要因によって決定されていると見なす。そして彼は、『ユングリンガタル』にはない魔女フルドゥの呪のエピソードを導入することで、「巫女の予言」で語られるような、世界の終末まで続く兄弟や近親者の間の争いを想起させ、ノルウェー王の歴史を壮大な終末へと向かう世界の中に位置づけようとした。⁽⁹⁾

このように「ユングリンガ・サガ」は、スノッリの「歴史観」を知るうえで重要な手掛かりであると思われる。ノルウェーの研究者スヴェッレ・バッゲは近年、『スノッリ・ストゥルソンのヘイムスクリングラにおける社会と政治』と題する本を書いた。彼の問題関心は、社会と政治的な行動とに関するスノッリの観念を再構成することであって、「個々の言説が事実であるかどうか」という伝統的な疑問⁽¹⁰⁾ではない。そのため『ヘイムスクリングラ』を、あたかも一つの実際の社会の叙述であるかのように読む、という立場を取る。この著書においては、「ユングリンガ・サガ」が『ヘイムスクリングラ』

全体の中で占める役割は非常に小さく評価されている。いわく、スノッリの「物語全体と政治の一般的な分析とは、彼が権力と財産をめぐる争いを親族の間においてすら通常の現象と見なしており、「ユングリンガ・サガ」におけるような「神話的な」説明を実際には必要としなかったことを暗示している⁽¹¹⁾」。

他の場合には、資料とした作品の中の「神話的な」説明をできるだけ「合理化」することに努めたスノッリが必要ともしないものを書いたのだろうか。そうではあるまい。バッゲ自身、まだ小王だったハーラル美髪王がノルウェー全土の征服を決心したエピソード——ギェザという美女を愛人にしようとしたが、一国の王でなければいやだと断わられて発奮し、全土を統一するまでは髪を梳らないことを誓った——について、スノッリが「この場合にそれ「合理化」をしそこねている理由」を考察している。それによれば、ノルウェーの統一という企ては前代未聞であったため、「神話的な」説明が必要と思われるということである。それに対して、後の王および王子たちがこの王国を征服しようとする場合には、先駆者としてのハーラルがいるし、彼に由来する相続権を主張

することができた。⁽¹²⁾一つのエピソードがこのような考察の対象とされているのに対し、一七のサガのうちの一つである「ユングリング・サガ」が対象として除外されるのは片手落ちだと思われる。

そのバグゲによれば、『ヘイムスクリングラ』におけるスノッリのいちばんの関心事はパワー・ポリティクスであるという。そして、王が王として成功を収めるためには、豪族たちの支持を取り付けることが何より重要で、そのためには、人間的魅力や雄弁さを含めたカリスマ性と、戦いに勝つこと——初期の戦いに勝つことで、より多くの支持を集めることが可能となり、それがその後の最終的な勝利につながる、すなわち「成功に勝る成功なし」——が必要である。では『ヘイムスクリングラ』の中で、王や豪族たちは何をめぐって争っているのか？

三 『ヘイムスクリングラ』におけるフェーデ

バグゲの著書『スノッリ・ストゥルルソンのヘイムスクリングラにおける社会と政治』の中心を成すと思われるのが、「争い」と題された章である。それによれば、『ヘイムスクリングラ』の中の争いの大多数は個人間の

争いであり、その争いに王は他の豪族と同じ仕方に関係している。これらの争いは「制度的な」見地もしくは rex iustus イデオロギーの観点から見るとむしろ、「フェーデ」としてのほうがよりよく理解できる。⁽¹³⁾そしてフェーデと言えば、北欧の、ひいてはゲルマン人の事例として、アイスランド・サガに描かれたものが取り上げられてきたという研究史がある。⁽¹⁴⁾

フェーデ (Fæde)⁽¹⁵⁾は、危害を加えられた被害者もしくはその属する集団と、加害者もしくはその属する集団との間の敵対関係(それに伴う行為も含む)のことを言う。基本的には、被害者側が加害者側に危害を加え返すという復讐行為で、この復讐行為は正当なものと思える。双方が互いに復讐の殺人を繰り返す場合もあるが、フェーデは果てしなく続くものではない。いずれの時点でしる、和解交渉によってフェーデが終了する場合には、賠償金の支払いがなされるのが普通である。このような自力による紛争解決は、公権力を欠く(一二六二/六四年までのアイスランドはその典型)もしくは存在しても極めて脆弱な中世の北欧においては、当然のことと見なされた。

フェーデとして見たほうがよく理解できる『ヘイムスクリングラ』の中の争いの例として挙げられているのが、「オーラヴ聖王のサガ」の中の、王の死につながる争いの発端で、「アザラシ殺し」とあだ名されるアースビョルンのエビソードである。

アースビョルンは、ノルウェー北部の豪族で、気前の良い歓待によって地区における自分の権力と影響力を強めることに努めている。北部における凶作ゆえにこれが難しくなったため、彼は穀物を買うために南西部の母方のおじエルリング・スキヤールグスソンのもとに行く。しかし同じ年、王はノルウェー西部からの穀物の輸出を禁じていた——王は西部に行って滞在するつもりだったからである。エルリングはジレンマに陥る。彼は王の命に背きたくはない一方で、親族を失望させることで面目を失いたくもない。彼はこのジレンマを、アースビョルンに自分の奴隷から穀物を買うのを許すことで解決しようとする。しかし、王の代官アザラシのソーリルはこの弁解を受け容れず、穀物を没収し、仕方なく空手で帰ったアースビョルンは隣人たちの笑いものとなる。

次の年、アースビョルンは、王の面前でセルソーリル

を殺すことで自分自身の復讐を行なう。アースビョルンは捕らえられ、死刑を宣告されるが、その時王の従士だったエルリングの息子スキヤールグは援助を求めて父のもとに急ぎ、一方彼の友人のソーラリンはさまざま口実を設けて死刑を延期する。そのうちにエルリングが到着し、代官の賠償金を受け取ってアースビョルンを助命するよう王に求める。王は激怒するが、双方は何とか和解に達する。しかし平和は長続きしなかった。彼らの間には新たな問題が起こり、完全な敵対へと至る。デンマークのクヌッド大王がノルウェーを攻撃してくると、エルリングはそちらに味方する。⁽¹⁶⁾

確かにここで描かれているのは、「アイスランド人のサガ」などに見られるフェーデと非常に似た経過をたどる争いである。当初の、ごくありふれた物質をめぐる争いが、名譽にかかわる問題へと発展し、復讐のための殺人がなされ、当事者の親族や友人が援助に駆けつけ、争いの規模が大きくなっていく。ただし、王権の存在しないアイスランドでは、王やその代官が争いの直接の原因としてかわってくることはほとんどないが、それに代わるものとして、貪欲なもしくは勢力伸張を目指す首領

およびそれに協力する(親族、友人、使用人など)がいる。中世のアイスランドにおいて争いを解決するには三つの方法があった。すなわち、①当事者間での直接交渉による、もしくは仲介者を介しての和解、②集会の場での訴訟、③フエーデ、である。サガが描くところによれば、争いの最も通常の結果はフエーデであるという印象を受けるが、これは、より興味深くより劇的な出来事をサガが好んで描くことによるものかもしれない。いずれにしても、フエーデが紛争解決のためのシステム全体の鍵である。和解も訴訟も、その結果を決めるのは、当事者たちの権力と方策であって、正義という抽象的な原則や法律ではなかった。⁽¹⁷⁾

・バグが次に問題にするのは、フエーデをエスカレーターさせるのは偶発的な衝突なのか、それとも故意の権力闘争なのか、ということである。強大な権力を誇る豪族エルリング・スキヤールグソン(前出)は、オーラヴ・トリュグヴァソン(二世、在位九九五—一〇〇〇年頃)およびそれに続く後継者たちと対立したが、それは彼の長期的な利益がオーラヴのそれとぶつかったからである。オーラヴは以前の王たちよりも国全体に対する直

接的な権力を欲し、それに対してエルリングは自分の伝統的な地位を保ち、可能ならばそれを高めようと戦った。その後、エルリングとオーラヴ聖王との初めての会見(スノッリによれば一〇一六年)では、王は自分の敵たちと同盟したことを理由にエルリングを非難し、彼がこれまでどおりの地位を保持することを認めようとしないう友人たちが間に入ったこともあって、エルリングが折れて王に決定を委ね、和解が成立したもようである。スノッリはこの結果を、王のパーソナリティの圧倒的な力ゆえに、誇り高いエルリングといえども屈服せざるをえなかった、と説明している。スノッリはここで、長期的な利益の衝突が、必ずしもあからさまな対立に至るわけではないことをほのめかしている。他のエピソードからも知られるのは、争いは通常、具体的な問題をめぐる直接的な衝突と、互いにつつかる長期的な利益との組み合わせの結果と見なされている、ということである。⁽¹⁸⁾

その一方で社会は、偶発的な衝突が拡大され、暴力による争いへと至るのを妨げる装置を持っていた——例えば、先の例における友人たちによる仲介などである。登場人物たちはかくして、暴力が交渉かの選択肢を持って

おり、この選択はかなりの程度、長期的な利益によって決定されたと思われる⁽¹⁹⁾。

エーリク血斧王（在位九三〇年頃）の息子たちによるフェーデは、ライヴァルたちを追い落とすという意識的な計画の結果である。彼らは野心的で、貪欲で、大人数であるがゆえに、経済的困難を抱えている。このことが彼らに、ライヴァルたちに対して一掃という無慈悲な政策を押し進めさせる。彼らの行動はすべて、彼ら自身の利益を増大させるための手段として説明することができる⁽²⁰⁾。

政治ゲームの参加者たちの最終的な目的はおそらく、出来る限り大きな権力と影響力であろう。スノッリが要求の正統性についてコメントすることはほとんどないし、王位請求者がその対抗者よりも請求権があることを示す論拠を提示することもない。かくして正統性は、このゲームへの入場券として働く。この条件が満たされれば、正当性の程度は問題にならず、知性、武力、支持者を引きつける能力が事を決する。このゲームは比較的限定された範囲内のゼロサム・ゲームで、戦いは社会秩序に対する侵害ではなく、その一部をなしている。つまり、

争いは社会の中で起き、この社会は一見そう見えるよりも安定しているのである⁽²¹⁾。

『ヘイムスクリングラ』の中の争いについて右に述べられた特徴は、アイスランドにおけるフェーデについて明らかにされたものとはほぼ重なる。すなわち、農民はより強い首領を選ぶ権利を持っており、首領は農民の忠誠を求めて互いに競争したこと、仲介をとおして競争者たちは、自分の権利を維持もしくは主張するために必要な援助を得ようとしたこと、フェーデは社会的な安定化の過程であること、などの特徴である。アイスランドは、北大西洋上の島国であることにより、初期に北歐人が移住した後、侵入されたことはなく、防衛のための軍事的な基盤を発達させる必要はなかった。また、王、諸侯、貴族の参事会などの、いかなる統治上の管理者も持たなかった。このような社会が、紛争解決手段としてのフェーデを制限するのではなく、フェーデの解決を法や擁護のシステムにより援助し促進することで社会秩序の維持を図ることは、十分納得できる⁽²²⁾。

アメリカの研究者、J・L・バイヨックの『アイスランド・サガにおけるフェーデ』という著作は、フェーデ

そのものに関してよりもむしろ、サガに描かれたフェューデに即して、サガの史料としての利用はこのようにすれば可能だ、ということを示したという点で画期的だと思われる。中世のアイスランド人は、自分たちの社会に関する物語を語るためにサガという伝統的な手段を用いた。そしてバイヨックは、サガの中で語られている出来事が現実⁽²³⁾に起こったかどうかということにこだわるのではなく、それを当時の社会固有の争いと心配の種に関する物語として理解する、という立場を取る。現存する個々のサガは、多かれ少なかれ著者による産物であるが、集合としてのサガは個人の創造力よりもはるかに深い根を持つ芸術様式である。そして、中世の聴衆とサガを語る者との間には「真実らしく見えること」⁽²³⁾についての契約があった。アイスランド社会についてのアイスランド人による物語に関しては妥当だと思われるこの方針は、ノルウェー社会についてのアイスランド人による物語についても当てはまるのだろうか？

バッゲの著作では、巻末近くに「叙述と現実」という短い節がおかれていて、そこで初めて(！)スノッリが叙述した社会ははたして現実のものだったのか、という

ことが問われる。このことを学説史上初めて問題にしたハルヴダン・コートは、スノッリの叙述はノルウェーの内乱の最後の段階、つまり一二〇〇年頃の時代の自分の経験に基づいている、という結論を出した。これに対してバッゲは、同時代のサガ、法、「王の鑑」などの他の資料に現われるものとしてのノルウェー社会は二つの点で大きく異なっていると反論する。第一に、内乱の後期の段階は、各派間の長期の闘争から成っていたこと、第二に、一三世紀初めの貴族を構成するのは明らかに王に仕える者たちであったこと、一方、『ヘイムスクリングラ』の中の豪族は王に仕える者であるよりも農民たちの指導者である。かくして、スノッリの叙述はその同時代のノルウェーに起源がある、という説は退けられる⁽²⁴⁾。

次いで検討されるのが、アイスランド起源説である。こちらのほうが「先験的にも経験的にもより強力そうである」⁽²⁵⁾——何しろスノッリ・ストゥルルソンはアイスランドの有力な首領、しかもストゥルルンガ時代の権力争いにおいて非常に重要な役割を演じた当事者である。そして、スノッリに見られる奇妙な点のいくつかは、彼が生きた時代のアイスランドの背景に照らして説明するこ

とができる。すなわち、彼が軍事に関して比較的疎いこと、外交政策に含まれる領土問題のナイーヴな扱い、フェーデの真の原因としての長期的な政治的利益への固執、イデオロギー問題への関心の欠如、「成功に勝る成功なし」という彼の法、などがその奇妙な点である。⁽²⁶⁾これだけ並んだら、アイスランド起源説のほうを有力視したくなるのではないかと思うが、しかしバッゲはあきらめない——わざわざこれだけ並べていることを見ても、彼が研究者として誠実な態度を取っていることは確かだと思ふのだが。スノッリの再構成が完全に不適切なわけではない、と信じる理由を、バッゲは次のように説明する。「スノッリの再構成は、自分自身で作出したのではなく、他の資料から取った多くの物語に基づいている。……これらの物語が、事実であれ作り出されたものである、社会に関する何らかの正確な情報を含んでいるということは、ありそうなことである」⁽²⁷⁾。ここで問題とされるべきは、それがノルウェー社会に関する情報か、アイスランド社会に関する情報か、ということのはずである。バッゲは自ら、サガの中のフェーデの叙述ほどの程度アイスランド起源なのか、ということを問いかける。フ

フェーデは、ニダロス大司教座周辺で成立した作品のような、ノルウェーのサガ『ファグルスキナ』などにおいてよりも、疑いなくアイスランド起源であるサガ、『モルキンスキンナ』、『ヘイムスクリングラ』においてのほうが重要な役割を演じているように見える。しかし、ノルウェーの歴史作品においてフェーデの物語が不足していることは、ノルウェーの伝承にそれらが存在しなかったというよりもむしろ、意図的な簡潔さとイデオロギー的な理由から説明できる、というのがバッゲの答えである。⁽²⁸⁾そして「叙述と現実」という節のしめくくり。「スノッリを厳密な意味で、彼自身の時代のはるか以前の社会状況の証言と見なすことはできないものの、多くの近代の歴史家に較べて彼は、根本的に異なっているとはいかぬ社会的経験に基づいてその再構成を行なうことができるという利点を持っていた」⁽²⁹⁾。利点を持っていたことは認められるが、そのことすなわち、スノッリの叙述がノルウェーの現実だった、ということにはならないはずだ。ここに至っての、バッゲのこの歯切れの悪さは一体どうしたわけだろうか？

四 『ヘイムスクリングラ』とナショナリズム

古アイスランド語で書かれた作品のうち、『ヘイムスクリングラ』ほど北欧諸国の後の時代の文学と国民の政治生活に広範で深い影響を与えたものはない、と言われる。『ヘイムスクリングラ』はノルウェーの国民的な見地から最も重要な本となった。つまりこの本は、上昇期および下降期において、決して枯果てることのない国民的な力の源泉だったのだ。³⁰⁾

ヴァイキング時代以降のノルウェーの歴史を概観する時、これは無理からぬことと思われる。一一三〇年代からの内乱期を経て、ノルウェー王権が安定するのが一二世紀前半。そしてこの世紀には、かつてノルウェーから出発したヴァイキングたちが定住していた、北大西洋の島々(すでに支配下にあったフェロー諸島、シェトランド諸島、オークニー諸島、ヘブリディーズ諸島、マン島に、新たにアイスランド、グリーンランドを加えた)をも支配下に収め、中世ノルウェーの「全盛期」と呼ばれる時代を迎える。しかし、一四世紀末からは、デンマークを連合の王とする北欧三国によるカルマル同盟の時期

に入る。その後、一六世紀にはスウェーデンではデンマーク支配に対する反乱が成功して連合を離脱するが、ノルウェーはデンマークとの同君連合にとどまり続ける。

一八一四年、今度は、ナポレオン戦争の戦後処理により、ナポレオン側だったデンマークから反ナポレオン側だったスウェーデンへと、ノルウェーは割譲される。そしてようやく一九〇五年、スウェーデンとの同君連合の平和的な解消により、ノルウェーは中世以降初めて再び自国の王を戴くようになる。

このような背景のもと、一八世紀半ば以降の民族意識の覚醒——この時期にはノルウェーの「栄光ある過去」である中世史の研究が盛んになるとともに、『ヘイムスクリングラ』が版を重ね広く読まれた³¹⁾——の中で、また一九世紀半ば以降のナショナリズムの高まりの中で、『ヘイムスクリングラ』はノルウェー人の国民的なアイデンティティの拠り所として熱心に読まれてきたのである。

では、ノルウェーを含む北欧の歴史学界は『ヘイムスクリングラ』をどのようなものと見てきたか。二〇世紀初めまで『ヘイムスクリングラ』は、ノルウェーの初期

の歴史のための最も重要な資料と見なされていた。しかし、一九一一年にスウェーデンの歴史家ラウリッツ・ヴェイブルが初期の北欧史についての一連の「批判的検討」を出版し、それらの中で、一〇、一一世紀の北欧史に関して、スノッリおよび他のアイスランドの歴史家たちによって与えられたほとんどの情報を退けた。「彼の意見はしだいに、少なくともデンマークとスウェーデンにおいては、そしてノルウェーにおいてもある程度は、正統な意見として定着した⁽³²⁾」。こうして、「スノッリおよび他のサガ作者たちの信憑性についての懐疑の増大と、出来事の歴史から社会の構造の歴史への現代のノルウェーの歴史学の発展との両方ゆえに、『ヘイムスクリングラ』はノルウェーの歴史学におけるその支配的な地位を大幅に失った⁽³³⁾」。

現在北欧三国のうち、デンマークとスウェーデンはEU（ヨーロッパ連合）に加盟しているが、ノルウェーは加盟していない。ノルウェーがこれまで加盟に終始無関心だったわけではなく、一九七二年にはEEC（ヨーロッパ経済共同体）への加盟をめぐる国民投票が行なわれ、僅差で否決されたこともあるし、近年加盟交渉が開

始されながら、結局実現しなかったという経緯もある。こうした状況を念頭に置いてのことだろう、「なぜノルウェーは王国として存続したか？」という一見挑発的な題名の論文を発表したノルウェーの研究者エイスタイン・リアンは、その冒頭で述べている。「ヨーロッパ連合への加盟をめぐる政治的な争いが、他のいかなる国にもましてノルウェーにおいて激しいことが明らかに。た今、その原因の一端を、一三八〇年から一八一四年までのデンマークとの連合の歴史に対するノルウェー人の関係に見出すことができる」。つまり、ノルウェー人は同君連合の時代（特に一五三六年以降）、政治への参加を一切認められなかったため、連合という概念すべては、外国の支配と遠く離れた政府を連想させ、否定的な方向に作用するのである、という⁽³⁴⁾。

バッゲは、『ヘイムスクリングラ』がノルウェーの歴史学において支配的な地位を失ったことを述べたすぐ後に、次のように続ける。「同時に、歴史学のこの発展は、スノッリを、人間、社会、歴史に対する一三世紀の態度の証言として用いるという新しい可能性を開いた⁽³⁵⁾」。そのこと自体に異論はない。異論があるのは、なぜそれを

ノルウェーについての証言であると、前述のように論理的なつながりを半ば無視して見なしうるのか、ということについてである。それはバッゲのノルウェー人としてのナシヨナリズムゆえではないか、と思う。⁽³⁶⁾「問題は、それ以外に使えるものがほとんどないことである」⁽³⁷⁾、だから是非でも『ヘイムスクリングラ』を使う方法を見つけないければ、というので出発点において誤りを犯してしまったのではないか。

五 むすびにかえて

スベツレ・バッゲの著作『スノツリ・ストウルルソンのヘイムスクリングラにおける社会と政治』は、『ヘイムスクリングラ』の分析においても、同時代の西欧の歴史叙述への目配りにおいても、非常な労作である。残念なことに、それがナシヨナリズムという一点においてつまづいてしまっている。アイスランド学派がサガの成立過程について熱心にブック・プローズ説を主張した一因は、民族主義との関連から自国のサガが、口頭伝承などといういい加減なものによって成立したのではなく、れっきとした文学者によって創作されたものである、と主

張しなかったためであったことが指摘されている。⁽³⁸⁾デンマークからの独立運動に燃えていた時期のアイスランドと、ヨーロッパ統合という大きな流れの中で自国の位置を見定めようとしている現在の北歐各国が直ちに重なるものではないかもしれない。しかし、ナシヨナリズムというのは当人が自覚していないことが多いだけに、その研究を参照する際には注意が必要だろう。かつてブック・プローズ説に足を取られて苦い経験をした私としては、『ヘイムスクリングラ』がどのようなものとして読まれてきたか、そして読まれているかということ抜きに、自分自身がどう読むかを考えることはできない。

(一) 『ヘイムスクリングラ』を初めとする資料を用い、主に九一一世紀のノルウェーおよびアイスランドを扱ったわが国における研究に次のものがある。熊野聰『北の農民ヴァイキング』(平凡社、一九八三年)、同『北歐初期社会の研究』(未来社、一九八六年)。特に史料論については後者の序章で扱われており、『ヘイムスクリングラ』のスノツリの序文が訳出された後、「……しかしその本の随所に見られる社会状況描写は彼「スノツリ」自身の歴史解釈であって、そのままわれわれの利用しうる史料ではない」(四一頁)と述べられている。また、特にフエーデについ

- (21) *ibid.*, pp. 85-90.
 (22) Byock, *op. cit.*, pp. 27 ff.
 (23) *ibid.*, pp. 38 ff.
 (24) Bagge, *op. cit.*, pp. 237-238.
 (25) *ibid.*, p. 238.
 (26) *ibid.*
 (27) *ibid.*, p. 239.
 (28) *ibid.*, p. 240.
 (29) *ibid.*, p. 240.
 (30) *Lie, op. cit.*, col. 301.
 (31) Jens Midgaard, *A Brief History of Norway*, Oslo: Johan Gundt Tanum Forlag, 1967, p. 64.
 (32) Bagge, *op. cit.*, p. 10.
 (33) *ibid.*, p. 11.
 (34) Øystein Rian, Why Did Norway Survive as a Kingdom?, *Scandinavian Journal of History*, 21-1 (1996), p. 49. ここで考察されているのは、デンマーク王クリスチヤン三世が一五三六年に出した有名な勅許状において、ノルウェーは以降、ユラン、フューン、シェラン、スコーネと、いわゆるデンマークの各地方と同列に、デンマーク王のもとにあるべきであり、別個の王国としての名称を持たないものとする、と述べたにもかかわらず、ノルウェーがその後も王国として存続しえたのはなぜか、ということである。
 (35) Bagge, *op. cit.*, p. 11.
 (36) ハッゲが中世におけるノルウェーのナショナルリズムを

扱った論文に次のものがある。Sverre Bagge, "Nationalism in Norway in the Middle Ages," *Scandinavian Journal of History*, 20-1 (1995), pp. 1-18. この本の結論は、中世のノルウェーは、いくつかの国民的な特徴をもつ、伝統的な権威主義国家の修正版だった。すなわち中世と現代のナショナルリズムの間にあるのは、種類の差というより程度の差である、というものである。それに付随して述べられているのが、ヨーロッパにおけるかなりの地域差が指摘されるべきであるということ。ドイツ、イタリア、東欧においてよりも、イギリス、フランス、北欧諸国のように古く、わりに輪郭のはっきりした、均質な国においてのほうが、国民国家へのより漸進的な発展が見られる。しかし現在のナショナルリズムの研究においては前者の国々に過度に焦点が当てられるため、実際よりも、根本的に新しく、革命的で、極端なナショナルリズムの絵が作り出されている(pp. 17-18)。この本の主張は、当を得たものと思われる。

ナショナルリズムが影響を及ぼしていると思われる北欧の研究者の他の論文に次のものがある。Christian Kroitzl, "Parent-Child Relations in Medieval Scandinavia According to Scandinavian Miracle Collections," *Scandinavian Journal of History*, 14-1 (1989), pp. 21-37. 奇蹟録を史料に、F・フリエスが提出した中世の子供像の北欧版を描き出すことを目指したものである。ここで出されている結論は、北欧においては身分の上下を問わず子供に對

する無関心は見られず、母親だけでなく父親も熱心に子供に関わっている、というもの。これが本当なら、現在の北欧に見られるような子供も含めての人権の重視、男女共生社会の起源はすでに中世に存在していた、ということになってまことに興味深いことになる。しかしこの論文では、ほとんど奇蹟録のみを史料として中世の親子関係を再構成しようとしている一方で、奇蹟録という史料の性格が十分考慮されていないように思われるので、この結論は、現在の状態を過去に投影した結果とも疑われる。ただ、この著者は、北欧では子供により冷たい態度を取っていた、と根

拠を示さず主張されたこと (Shulamit Shahar, *Die Frau im Mittelalter*, Königstein, 1981) に猛烈な反発を感じてこの論文を書いた節があった、この反発は実にもっともなものと思われる。

(16) Bagge, *Society and Politics in Snorri Sturluson's Heimskringla*, p. 10.

(18) Josse L. Byock, *Medieval Icelandic: Society, Sagas and Power*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1988, pp. 38-48.

(一橋大学講師)